

2019年
9月2日号 No.1535



週刊

教育資料

EDUCATIONAL PUBLIC OPINION <http://www.kyoiku-shiryō.co.jp>



潮流

里山を開拓し、みんなの「ふるさと」に

NPO法人東京里山開拓団代表 堀崎 茂

資料

令和元年度学校基本調査 (速報値)

文部科学省

CONTENTS

▶ 2 潮流

里山を開拓し、みんなの「ふるさと」に
堀崎 茂(NPO法人東京里山開拓団代表)

▶ 5 解説・ニュースの焦点

○学力テスト踏まえた授業アイデア例を公開
編集部
○海洋立国推進功労で高知海洋高校など表彰
編集部

▶ 8 特別企画

文部科学省創生実行計画でどう変わる？

▶ 12 校長講話

いじめ、伝統文化、英語への関心を高める講話
小川深雪(東京都文京区立林町小学校校長)

▶ 14 合理的配慮—現場の対応事例

幼小中高・就労のつながりで支援事例集
—千葉県船橋市①
編集部

▶ 16 実践！ 校長塾

まちの人が集い育つセンター的機能へ②
～思いの実現が好循環を生む～
野口みか子(横浜市立権太坂小学校校長)

▶ 19 資料

令和元年度学校基本調査(速報値)
文部科学省

▶ 35 教育の危機管理

「懲戒」を考える法的視点・教育的視点
廣瀬裕一(上越教育大学名誉教授)

▶ 38 向山行雄のドキュメント『学校経営』

構想は緻密に、行動は大胆に
向山行雄(敬愛大学国際学部教授・教職センター長、全国連合小学校長会顧問)

▶ 40 玉置崇の新学期指導要領 現場での生かし方

学習指導要領解説書を有効活用する
玉置 崇(岐阜聖徳学園大学教育学部教授)

▶ 42 変わる教育委員会

「一人ひとりが主役」本気の働き方改革
細田真由美(さいたま市教育委員会教育長)

▶ 43 教育問題法律相談

国連子どもの権利委員会の総括所見・その③
角南和子(弁護士)

▶ 44 通信・議会質疑

不登校対策③

▶ 46 変わる！英語教育

全国学力・学習状況調査から①
編集部

▶ 48 BOOK

『真正の深い学びへの誘い』
『小児科の先生が車椅子だったら』

▶ 49 自著を語る

『なぜ最近の若者は突然辞めるのか』
平賀充記(ツナグ働き方研究所所長)

▶ 50 特別資料

平成30年度教職課程認定大学等実地視察に
ついて(概要)

▶ 52 マイオピニオン

ある“義務教育学校サミット”
天笠 茂(千葉大学特任教授)



撮影：浅葉美穂 (Miho Asaba)

ほりさきしげる
堀崎茂氏に聞く
NPO法人東京里山開拓団代表

潮流

里山を開拓し、 みんなの「ふるさと」に

荒れた山林を開拓するとともに
児童養護施設の子どもたちと
里山を活用することで、たくましく
すこやかに育つ環境を作ってきた。

環境保全と社会福祉に活用

代表の堀崎さんは、元々アウトドア好きで、手つかずの自然を求めているうちに、東京近郊でも林業・農業や生活などに使われなくなって荒れたままの山林がたくさんあることに気づいたという。最初は八王子市内の、地元の人でも数十年も入っていない荒れた山林に入り、地主さんの了解を得て、道や広場を一人で伐り拓いていったという。その里山に家族や友人を招くと、何もない山林なのに、自然の中で過ごすことに大人も子どもも満面の笑顔を見せてくれた。その笑顔を見ているうちに、これは社会に貢献できる場になるのではと思ったという。

堀崎 2006年に、八王子市の荒れた山林に行きました。手作業で少しずつ道や広場を作り、まずは自分の楽しみで活用していましたが、学生時代に児童養護施設のボランティア経験があったこともあり、この里山を児童養護施設の子どもたちのふるさとにできないかと考えて、2009年にNPO法人を立ち上げました。その後、理解のある施設長や職員の方の協力が得られるようになり、子どもたちと一緒に荒れた山林を開拓して

広場や道を拡げ、現地の自然の恵みを生かしてツリーハウス、ブランコ、アスレチック、かまど、トイレづくりなどを進めました。初めはケガなどいろいろと心配していましたが、子どもたちはみな「また行きたい！」と目を輝かせてくれます。

その様子を見て、環境保全と社会福祉の「二石二鳥」の活動になると確信しました。

現在、NPOのメンバーは一般のサラリーマンや大学生、主婦など20〜40歳代の20人程度。絵本作家で子どもの遊び研究家でもあった、かこさとし（加古里子）さんからの「よりたくましく、よりすこやかに」というメッセージに感銘して活動方針にしているという。

里山開拓では、大人の考えを子どもたちに押し付けたり、無理に指導したりしないようにしている。最低限の安全面での配慮や見守りしつつも、そこにある自然を使って、子どもたちの自発的な意志や発想をできるだけ尊重しているという。手づくりした石かまどに枯れ木を集めて火を起こし、たき火で昼食を作ったり、午後は、ハンモックや自作の展望台でまったりしたり、木で工作したり、虫や花を探したりと、自分のやりたいことをして過ごす時間を大切に

している。高速道路のインターチェンジに近く、都心から1時間ほどで行けるため、日帰りのプログラムでもゆっくりと過ごせる余裕がある。

堀崎 春は「里山運動会」や草花の叩き染め、芋栽培など、夏は水鉄砲づくりと水かけ合戦やスイカ割り、鳥の巣箱づくり、秋はハロウィンお化け退治や月見団子づくり、冬は新たな道づくりや広場の拡張、落ち葉集めなど、四季を通じて月に1回程度、子どもたちの発想と自然の恵みを生かした活動を行っており、活動日の1〜2週間前にはメンバーで打ち合わせや準備会を行っています。子どもたちは大人の考える自然遊びなんかより里山開拓そのものに夢中になり、自分の居場所づくりを進めています。

新「ふんわり」イベント

児童養護施設の子どもたちにとっては、里山は単に遊びのフィールドで居場所であること以上の意味があったようだ。まず、引率してきた職員が、普段は大人の前ではなかなか見せない本心や、仲間と協力しあう姿を見て、子どもたちの変化に目を見張ったという。また、数回ほど里山開拓を経

験した子どもが、新入りの子どもに「こうやるんだよ」などと、自分の得意な「技」を見せて、優しくリードする姿も見られた。

堀崎 私たちが活動している里山は、自然との関わり方に制約のある登山やキャンプ場とはまた違って、道や広場を自分たちで作ったり、木に登ったり木を伐ったりと、少しずつ手を加えていくことができる環境です。サポートしている大人側も、子どもの「やりたい」という意志を尊重し、大人の思考で制約しないように心がけています。また、木にかけたハンモックに身体を包み込みながら誰にも制約されない自由な時間を過ごすといったことも大切にしています。また、里山開拓も効率や結果より、試行錯誤を重視しています。子どもたちにとっても手間はかかりますが、愛着が持てるようになります。こうした地道な取り組みが、そこで月1回「里山で暮らす」体験になって、児童養護施設の子どもたちが失ってしまった「ふるさと」を自ら作り出すことにつながると考えています。

里山開拓では、大人よりも子どもの視点からの自然の見方、自然の活用の仕方を重視している。例えば、フィールドにしてい

る里山には急な坂があり、以前は楽に上れるよう階段にしようかと大人で相談したが、子どもたちの様子をよく見ると、そのままでも助け合いながら上ったり、滑り台代わりにして下ったりと、大切な意味のある場になっている。小さな失敗をすることになっても、自然の中で何が危険かを判断する力を育成する機会になるという。

堀崎 児童養護施設の子どもたちと7年間にわたって開拓してきた里山ですが、今後は、企業の研修・体験の場としても提供していけたらと思っています。子どもだけでなく大人にとっても自然のフィールドの中で過ごすことは大きな心の安らぎになりますし、働くために大切な自主性・協調性・創造性・やりがいなども養われます。同時に、児童養護施設の高校生が自分の里山経験を活かした運営支援アルバイトのできる自立支援活動にもなり、双方にメリットがあります。今秋には、まず大手システム会社のSCSKが有償参加する社会事業としての運営を開始する予定です。

全国の里山を紹介するサイトも

堀崎代表は、東京の八王子市の里山での

活動を通して、定期的に人が関われば荒れ放題の山林も人がさまざまな目的で活用できる場に行けることを実感したことで、こうした活動を全国の荒れた山林に広げられないかと構想している。今年、同NPOのホームページで、「日本ノ里山ヲ鳥瞰スル」という全国の400カ所以上の里山を紹介するサイトを公開した。

堀崎 例えば、全国の小中学校の周りには、都市部であっても少し足を延ばせば、多分里山になりうる場所があります。荒れ放題で入れないところも多いのですが、こうした山林に定期的に入ることで、里山として少しずつ再生していきます。そして入っているうちに子どもたちの表情や見方、発想が豊かになり、周りの大人の方もそれに感化されているような人が関わるようになり、活用も広がっていくと思います。私たちのようにふるさとづくりにつなげることもできます。もし全国の小中学校で子どもたちが主体的に取り組み始めたら、荒れた山林の現状も大きく変わるのではないのでしょうか。

この「日本ノ里山ヲ鳥瞰スル」サイトは、同NPO内のグループの一つである「里山ネット調査隊」が企画運営している。里山

の位置や管理主体、関連するニュースやイベントなどの情報が得られるようになってくる。こうした情報サイトを充実させるためには、情報協力してくれるメンバーが必要で、現在、広く募集しているという。

このような全国の身近にある里山の情報を公開しているのも、少しでも里山の現状やその活用に関心を持って活動する人を増やしたいという思いからだ。学校の中で、環境学習をすることも意義があるが、何よりも実際に里山などの現場に出かけて、地域の自然に触れたり、たくましく生き抜く動植物を見つかったりすることも意義深い。

堀崎 日本の社会福祉制度は、長年ハコモノを増やすことが行政の目標になり財政を逼迫^{ひびく}させてきました。私たちのシンポジウムで、支援いただいている児童養護施設の施設長が「むしろ里山を児童養護施設にしたい」と発言されたことがあります。私たちも、単なる自然遊びの場というより、大きく言えば「今の社会の在り方は、どこかおかしくないか」と、社会全体の有り様について里山を通して見つめ直す場になればとも考えています。

NPO法人東京里山開拓団 // <http://sato.yamapioneers.web.fc2.com/>